

2022(令和4)年7月30日

## コロナ禍における登山と山岳会の在り方

例年、3月末から7月頃にかけて各地で山開きが行われ、関係者が登山の安全祈願をします。

報道によれば、国内観光客はコロナ禍前の水準を下回ってはいますが、今年は増加傾向にあるとのことで、各地の山小屋関係者の期待も大きいのではないのでしょうか。

コロナ禍初年の一昨年(2020年)、例年20万人以上が訪れる富士山では、5合目から上の登山道がすべて閉鎖され、南アルプスでも一部の登山道の利用が禁止されました。また、北アルプスや八ヶ岳等では一部の山小屋が閉鎖されましたが、昨年からは順次、宿泊の事前予約制や定員の抑制などの感染防止対策が徹底され、今年は週末やお盆期間を中心に満室となっている山小屋もあるそうです。

中京山岳会でも、今年5月に西穂高岳、7月に鹿島槍ヶ岳の山行を実施しましたが、宿泊した山小屋では、シーツの持参やアルコール消毒などの感染防止対策がしっかりとされており、快適に過ごせました。但し、宿泊客はまだまだ少ないと感じました。



可憐なコマクサ



鹿島槍ヶ岳に続く稜線



爺が岳の雷鳥

ところで、コロナ禍は登山の傾向を変化させています。一つは、「初心者が増加」です。ある調査によれば、登山経験が1年未満の人は、一昨年は約3人に1人の割合でしたが、昨年は2人に1人と、初心者が増えていたそうです。また、登山の禁止や自粛の影響からか、「遠くて高い山」から「近くて低い山」へと行先が変化し、それに伴い遭難も増えています。通常は、午後3時迄の下山を考えて登山計画を立てますが、午後に登山を開始する人が増え、しかも、登山に関する知識や体力の不足に加え、十分な飲料水や食料、必要な資機材も携行していないのでは、遭難が増えるのも必至です。遭難に対応する警察でも、コロナ禍で経験の浅い単独登山者が増えたことと、身近な山という気の緩みがあるのが原因ではないかと見ているようです。

さて、このコロナ禍において、日本山岳・スポーツクライミング協会からは「登山再開に向けてのガイドライン」、全国山岳遭難対策中央協議会から「新型コロナウイルス感染防止のための新しい登山様式」など、安全登山の資料が公開されていますが、私達もこの機会に、山岳会の在り方や存在意義について、改めて考えてみる必要があると思います。

単独登山は、安全管理の判断を1人ですするため、遭難した際には発見や救助が遅れるリスクがあります。そこで、中京山岳会では既に実施していますが、可能な限り会員以外の初心者も全国の山岳会の定例山行に参加してもらおう。そして、その際に単独登山のリスク説明や適切なアドバイスを行うといった活動を継続すれば、自然に会員が増え、同時に遭難防止や国民の健康増進という社会貢献活動にも寄与できるのではないかと思います。(投稿;2022年7月30日 市橋)